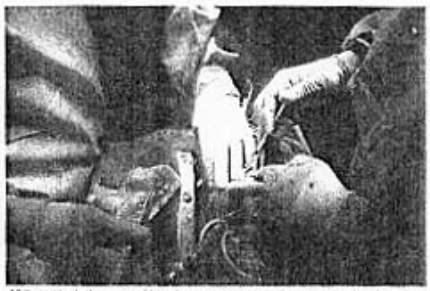
心臓の血管再生に成功

信大病院

国内3施設目　自己骨髄細胞移植で

信大医学部附属病院（勝山努病院長）は12日、9月に虚血性心疾患への自己骨髄細胞移植を初めて施行し、成功したと発表した。これまで施行してきたバージャー病などの末梢動脈閉塞性疾患への自己骨髄細胞移植を心疾患に応用したもの。国内では3施設目となるが、移植細胞として高純度に分離した内皮前駆細胞を使い、霊長類の動物実験により安全性と有効性を確認したうえでの施行は世界で初めてとしている。

患者は61歳の男性。糖尿病による狭心症（三枝病変）で、右冠動脈にはステントを留置したが、再狭窄が認められていた。特に狭窄が大きかったのが左回旋枝で、この領域にバイパスが可能な血管が認められなかったことから、自己骨髄細胞移植による血管再生療法の適応が判断された。



純度の高い内皮前駆細胞を心筋に注入する（同院提供）

血管再生療法は9月1日、冠動脈バイパス術とのハイブリッド治療として施行。患者の骨髄液約550ccを採取し、分離を進めると同時に、右冠動脈、左前下行枝のバイパス手術を行った。さらに、虚血の著しい左回旋枝領域20カ所に、5・3cc に濃縮した内皮前駆細胞を筋注した。術後に副作用は認められず、バイパス手術領域と細胞移植領域で血流が著明に改善。患者は今月2日に退院した。

今回の血管再生療法は、移植する細胞を高い純度に分離して安全性・有効性を高めたのが特徴だ。従来同院が行ってきた四肢の血管再生療法では、骨髄液のうち血管以外の組織にも分化する可能性を持つ骨髄単核球を移植。これまでに17例を施行している。心疾患への応用にあたっては、心臓内に別の組織が生まれることに伴う不整脈などのリスクを抑えるため、より純度の高いCD34陽性細胞を磁気細胞分離法によって分離し、使用した。

担当した同院先端心臓血管病センターの池田宇一センター長（循環器内科教授）は会見で、「バイパスのできない重症虚血性心疾患の患者さんにとって福音になると確信している。将来は標準治療になっていく可能性が十分ある」としたうえで、今後、開胸せずに手首からカテーテルで細胞注入を行う方法を模索すると した。また、執刀した天野純心臓血管外科教授は「心不全で苦しんでいる方の治療の選択肢が広がる」と期待を寄せた。

04年医療施設調査・病院報告

診療所の無床化 依然続く

有床診は10年前の半数以下に

厚生労働省がこのほど公表した「2004年医療施設（動態）調査・病院報告の概況」によると、県内の一般診療所数は前年より34施設増の150施設となったことが分かった。一方、有床診療所は209施設で、前年より22施設も減少しており、診療所の無床化は依然として進んでいる。

医療施設調査から県内の一般診療所数の推移をみると、94年調査の1322施設から、この10年間で179施設も増えた。人口10万対診療所数も94年の60・7に対し、04年は67・9で、7施設増加した。

しかし、増加しているのは無床で、有床は減少の一途を辿っている。無床がこの10年間で約440施設も増えているのに対し、有床は約260施設も減少し、一般診療所に占める有床の割合は94年の35・2%から、04年は13・9%まで低下した。

平均在院日数は全国最短17・5日

このほか、調査によると、県内病院（一般病床）の平均在院日数は、全国平均を2・7日下回る17・5日で全国最短を維持した。しかし、次に短い東京都・静岡県（18・0日）との差は0・5日まで縮小した。また、療養病床も本県は96・0日で、宮城県の95・3日に次ぐ全国2番目の短さ。全国平均の172・6日を大きく下回った。精神病床は270・7日で、全国平均を70日程度下回った。

一般病床の人口10万対病床数は、全国平均714・4床に対し、本県は725・7床で若干上回った。一方、療養病床の65歳以上人口10万対病床数は、全国平均の150・2床に対し、長野県は759・6床と半数程度にとどまった。